

タイム = トライアル

渡邊 秀樹

10月の晴れた日、私は晴れた空の下、楽しいはずのサイクリングをわざわざ苦しくするバカでした。富士スバルラインに登るのです。標高900mから2300mまで登るのです。それはもう苦しいこととらったらありやありません。おんれの限界を越すのです。競争です。私は競争にまけました。サイクリング部史上、永遠不滅の金字塔をたてたようです。確か3時間半をちょっとこえるタイムでした。本当は二人なと、部誌には書きたくないのです。恥です。だから二人なが書けなかったのがタイムトライアルの喜ぶ喜ぶです。

タイム = トライアルの前、私は西尾さんと三浦さんと「勝つ」と心に決めました。「まあ、三浦さんは負けるかもしれないけれど、西尾さんには勝つ」。それと志波にも勝てると思いました。けれど、志波は、役員とかな人とかで走りまわっていた。「何や、かみやま。でも、俺から逃げた人だ。よし志波には不戦勝！」と思いましたが、下から志波には勝ったのです。タイム = トライアルの前日は、出走順が決まりました。私は順番が後の方でした。西尾さんは前の方でした。三浦さんは私のすぐ次で、志波は「かみやま」。逃げられる立場は非常に不利だと私は思った。当日は、すごくいい天気です。朝のさわやかな空気が、さよら

びり、寒を伴って、快調よりのです。昨夜は、三浦さんが、GOROがなんかのピンナップを私の顔に押しつけたので、夜中、そのPIN-UP GIRLの、胸がれた××××が、目にちらっいて、中々寝られませんでした。「しまった！三浦さんの策略にかかっていた！」不注意だったと反省しました。

ハネリよスタートです。坊ちゃんタイヤの各取番が行きます。室田さんが、トークリップに足が入りにくいよう、足をバタバタやっていました。アホの金井君は、「実力の差で落ちた。疲れた」と言いました。でも私は知っているのです。こういう時彼は、ビューンと飛んでいってしまって、私が痛いのを願って、追いつくと、「100%の力を出してしまった、エヘン……」と喋って笑うのです。だから私はもうビョウかかります。金井の代は、もはや、あえみえの、ウツパーワニなのです。

私は今スタートしました。走ります。よし快調、快調、ヤリ組子。これなら乗勝と思いました。と思ったら、三浦さんと西口の抜かれました。「三浦さんと西口はどうも後をばててつらかった」と思いました。その時、私の顔は首さめていたが違、ありません。次に希島さんが行きました。私は快調なのにどうして抜かれるのか不思議です。「あー、空が青い、青い」なぜか私はつがやんやんした。

3合目と私は行きました。確か、私の後ろはもう誰もいないので(ど)うもた々で快調。もうそろそろ、西尾さんにも追いつくかな

と思いましたが、中々、追いつきません。西尾さんには会わずには古木さんに会いました。「ヤッた、古木さんに勝った」と普通たう言うのには、と私は思いました。古木さんに私はもう既に回抜かれていますのです。かまです。走ることはなんてかまな人でしよう。タイム＝トライアルではいつもこう思います。

十合目を過ぎると、空が広くなった気がします。ずいぶん登ったなと思えます。同時に、もうみんなは、五合目についてるなと思えます。そして、西尾さんは、もしかしたら、崖から落ちてしまったのでは、と心配しました。私はまだ自分の勝利(西尾さんに対する)を確信しているようです。こうして、西尾さんはもう死んだことにしました。五合目の手前は、ずっと平坦な道です。去年は、ここをラスト・スパートで、一気に走り抜けました。私はここで休むことにしました。西尾さんには勝ったと思えました。(西尾さんは死んでいるのです) ゴールに着いた時、そこには死人だはずの西尾さんがいました。私はまけたのです。金井が、「おまえ遅いなあ」といりました。な人が嬉しそうに顔を返してました。西尾さんは無表情な顔をしてます。この人は怒っているのか、嬉しいのか全然顔に出ないのです。言葉だけは「カツイター」とか「ヤッタロ！」と言うのですが、顔に出ないのです。従って私はまだ西尾さんの心が緩みません。

私は結果的にギリでしたが、もしみんなが、崖から落ちてしまったら、1位にたれたと思えます。富岳山の五合目はきれいで

す。空が青いです。すがすがしい。少し疲れました。二山から
下界にダウンヒルを楽しみます。

———— タイム＝トライアルに散ったアホの子